

東京都市大学 横浜キャンパス ビオトープ・パッケージ



ビオトープ導入の経緯

横浜市では宅地の増加によって湿地が減少している。その結果、野生生物のハビタットの減少、ヒートアイランド現象などの環境問題が顕在化している。これらの問題の解決策の一つとして2004年に田中章が「**ビオトープ・パッケージ**」という生物多様性に配慮した緑化手法を提唱した。「**ビオトープ・パッケージ**」は、2004年10月から2010年3月までは本学横浜キャンパス2号館屋上に、2010年3月以降は本学横浜キャンパスの中庭に設置した。ビオトープ・パッケージの過去の研究から、ヒートアイランド現象の緩和効果、人に対する視覚的冷涼効果や景観の癒し効果、藻類抑制手法、コケ植物の現状と課題、メダカのハビタット形成、生物の飛来状況、生物多様性保全への寄与が明らかになっている。

ビオトープ・パッケージができるまで

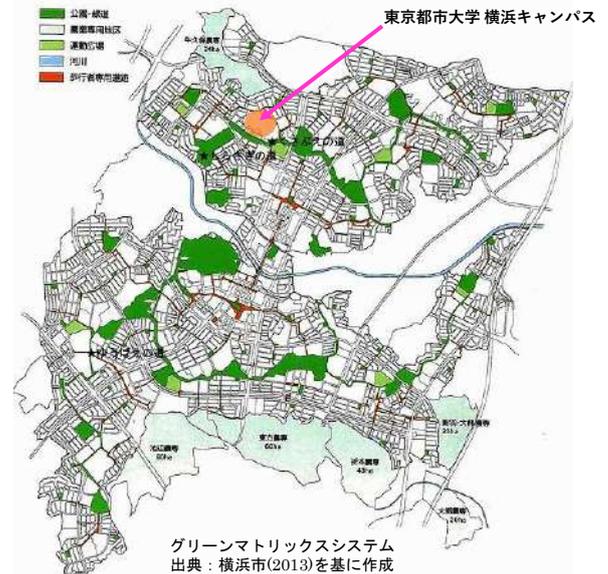


ビオトープ・パッケージでつくる生態系ネットワーク

港北ニュータウン（横浜市都筑区）における土地区画整理事業では、グリーンマトリックスシステムと呼ばれるオープンスペース計画によって、当該地域において現存している緑地や生態系を計画的に保全することで、緑のネットワークを考慮した区画整理がなされた。このように、まちづくりにおいて緑のネットワークづくりを考慮して区画整理がなされるのが理想だが、市町村単位ではそれが難しい。その改善案として、ビオトープ・パッケージの普及がある。市町村全体から見れば微小なものであっても、郊外のまとまった面積の緑を軸に、動物たちの移動路としての緑を確保し、都市の中に点在する緑や自然を連絡して、少しずつ緑を広めていくことで、生態系ネットワークの充実がはかれ、都市の生態系の復元・維持、生物誘致が行える。

ビオトープ・パッケージで見られるいきものたち

ビオトープ・パッケージでは、**植物166種、動物105種**が確認されている。中でも鳥類のカルガモ、ハシボソガラスなどはグリーンマトリックスの緑地から飛来して、本学のビオトープを「水飲み場、水浴び場」として利用している姿がよくみられる。ハシボソガラスは水飲み場のほかにメダカなどを餌とし採餌場として利用している姿も見られる。水生植物が豊富にあるため、トンボ類が産卵しやすい環境、ハチ類やチョウ類が蜜を吸ったり水を飲んだりできる環境があることで、昆虫も多く見られる。



ランドスケープ研究会

E-mail: landscape.tcu@gmail.com
HP: http://www.comm.tcu.ac.jp/tanaka-semi/Landscape_study_group/index.html
Instagram: @tanaka_le.lab

